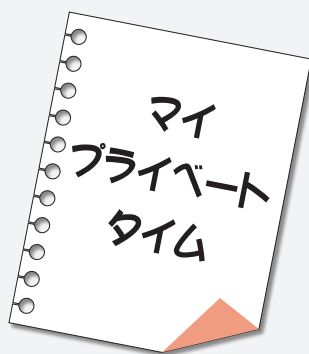


連携と思いやりで進めるまちづくり

ひでしま としゆき
さが 秀島敏行
佐賀市長(佐賀県)

Toshiyuki Hideshima



連携の大切さ

昨年(2016年)佐賀市で、熱気球の世界選手権が開催されました。本市は、世界的に有名な熱気球の町で、世界選手権の開催は、今回で3回目となります。熱気球の競技というのは、簡単に言うと、離陸した気球が、どれだけ正確に目的地にたどり着けるかを競うものです。熱気球は、空気を暖めると軽くなるという非常に基礎的な原理を使ったものであり、自分では上下することしかできません。このため、目的地に



熱気球でフライト準備をするパイロットとクルー



飛び立つバルーンを見守る筆者

私は、仕事でもこの熱気球と同じことが言えると思っています。どんなに優秀なリーダーでも、一人でできる仕事というのはたかが知れています。知識や技術に加え、多種多様な経験や感性、特技を持つている人間が集まっているのが組織であり、組織に所属している人たちが、その能力を遺憾なく発揮することによって、いい仕事ができると思っています。

行くには、高度によって方向や強さの異なる風を上手につかんで飛ぶ必要があります。熱気球では、空気を暖めるバーナーを操る人のことをパイロットと呼びますが、そのパイロットと同じぐらいに重要なのが、地上から高度ごとの風向きやその強さなどの情報をパイロットに適切に伝える、地上クルーという人たちの存在なのです。競技を見ていると、操縦しているパイロットだけが脚光を浴びる場面が多いのですが、実際には、地上のクルーとパイロットの連携がしっかりできなければ熱気球を飛ばすことはできないのです。強いチームは、みんなこの連携がしっかりとできています。

合併で新しい連携

私は、市職員出身の市長であり、職員と一緒に働いてくれる大切な仲間だと思っています。私は就任以来、この仲間たちと一緒に暮らす市民の皆さんにとってより良いまちづくりをするにはどうすればよいかを考え、仕事を組み立て、実行するというスタイルをとってきました。

本市は、平成17年と19年の2度の合併を経て現在の姿になりました。現在の佐賀市は、北は背振山系の山々をはさんで、福岡市、糸島市と隣接しており、南は広く有明海に面しています。本市の中部から南部地域は、広大な佐賀平野の中であって平坦な土地のため、特に市街地は昔から大雨による水害に悩まされてきました。この水害から街を守るということは、歴代の佐賀市長にとって非常に重要な仕事であり、ダム建設はもちろん、河川や水路の整備、堰やポンプの設置など、これまで国や県と一緒にやってさまざまなハード整備が行われてきました。しかしながら、本市の水害を防ぐためにはハード整備だけでは越えることができないハードルがあります。それは、水害が多く発生する梅雨時が、優良農地が多い本市で稲作を営む農家にとっては、多くの水が必要とする時期でもあるということなのです。このため私たちは、降った雨をポンプで海に排出すればよいというもの



樋門を視察する筆者（左から3人目）

ではなく、必要な水はきちんと確保しておくこともまた必要となってくるわけです。このことは、長い間私たちにとって非常に難しい課題でありました。ところが、合併によって山から海までつながる1つの町になったことで、私たちは、利害が対立する2つの事柄を話し合いと相手を思いやる気持ちで解決する「連携」という手段を持つことができました。近年、本市においても、いわゆるゲリラ豪雨が襲ってくるがありますが、排水と貯水の適切な調整が図られることによって、市街地における水の被害は減少傾向にあります。

市民の足とこのバス

「趣味は何ですか？」と聞かれた時、以前は「釣りです」と即答していましたが、市長になってからは、ほとんど釣りに行く機会がなくなっていました。代わりに、最近では「気功と家庭菜園です」と答えるようにしています。気功は、いわゆる競技スポーツのような激しい運動と違って、年齢を問わず誰もがができる健康法です。私は、随分以前から気功に取り組んでいます。10年ほど前、中国西部のウルムチ市で開かれた国際会議に出席したとき、朝早くホテル近くの公園で地元の人たちに混じって太極拳をしていたところ、同行していた職員から、「同化してましたよ」と言われてしまいました。

また、家庭菜園では、一年中いろんな作物を作っています。植物はとても正直で、忙しきにかまけてこちらが手を抜くと、すぐに生育に影響が出ますし、気温が高すぎても水が多すぎても上手く育ちません。野菜には手をかけてやることも必要です。野菜の気持ちになることも必要です。人間関係と同じだな、とつくづく感じます。それに、自分自身が野菜作りをしていると、気象状況や病害虫の発生状況を肌で感じる事ができて、農家の皆さんのご苦労がよく分かります。

こんな私が、市長就任当初から続けてき

たのが、バス通勤です。バスに乗ると、車による移動に比べて実によく歩くということが分かります。それに、バスの車窓から見える街並みや人通り、店舗の様子は、街の現状を的確に伝えてくれます。私は、職員にも仕事や通勤にできる限りバスを利用するよう勧めてきました。バス会社、とりわけ本市の交通局は利用者の減少が著しく、経営が厳しさを増していますが、超高齢社会を迎え、市民の足としてのバスはこれから益々重要性が増してくると思っていますからです。

相手を思いやる心、お互いに連携して取り組む姿勢、そして自ら動くこと、がこれからの地方都市に必要なことではないかと思えますし、私の信条として今後とも続けていきたいと思っています。



ラッピングバス出発式でのひとコマ